

短 報

病院プロジェクトを通じたホスピタルデザイン教育の実践

森絵美^{*1} 合田喜賢^{*1} 岩藤百香^{*1} 中村俊介^{*1}
松本正富^{*2} 平野聖^{*1} 青木陸祐^{*1}

要 約

本稿は、2017年に川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療福祉デザイン学科が協力病院と実施した「病院プロジェクト」による教育の実践について報告したものである。プロジェクトに参加した学生の振り返りから、病院と連携を図るプロジェクトがデザインワークの認識につながり、プロジェクト後の学生の成長の中に概ね実践的思考様式の萌芽を見出すことができた。

1. はじめに

近年、医療福祉機関の持続可能な環境整備に、大学が大学の教育や研究を活かしながら貢献する事例が増えている¹²⁾。大学の教育研究の充実と医療福祉環境に対する問題解決をつなぐ取り組みである。先の研究では、医療機関が取り組んできた環境改善活動に加え、芸術系の学生団体が院内環境をデザインする目的で実施しているのに対し、本研究は、医療現場における実践的デザイン教育の可能性を探ることを目的とするものである。

本稿は、2017年に川崎医療福祉大学医療福祉マネジメント学部医療福祉デザイン学科が協力病院（以下、A病院）と実施した、院内環境における問題解決のためのデザインの視点による改善提案をする「病院プロジェクト（以下、プロジェクト）」について報告すると共に、将来的に医療現場内で情報発信や環境整備に従事する人材^{3,4)}の育成を目的としたホスピタルデザイン^{†1)}教育を考察する。

2. 「病院プロジェクト」の位置づけ

先述した当該学科の特徴的なカリキュラムとして、医療現場における視覚伝達ツールを用いた情報発信ならびに環境整備を学ぶ学生の学年縦断型の学修機会を設け、協力病院の中で、学生がデザインによる改善提案を実施する課外活動が「病院プロジェクト」である。

3. 実践による教育の流れ

3.1 プロジェクトの概要とスケジュール（図1）

2017年2月、当該学科が推進するプロジェクトに関心を持ったA病院（岡山県：60床）より要望を受けたことをきっかけに、有志学生2年生5名、3年生10名からなる学年縦断型のチームを立ち上げた。

3.2 学生への働きかけ

学生に対して、実地調査前の事前説明を行った。病院側の要望を念頭に置き、利用者の視点で物事を観察した上で、各自が感じた点を率直に表現し、各個人の意見を大切にしながらグループ検討に参加するよう指導を行った。加えて、病院内における適切な視覚的情報伝達の必要性と役割について説明し、プロジェクトに対するモチベーションを喚起した。

3.3 学生による実地調査

改善提案を行うにあたり、まず、病院での実地調査を行った。実地調査の際に、表1の「病院を取り巻く現状」と「提案に対する要望」が病院側から学生に伝えられた（図2）。また、アイカメラや色弱模擬フィルタなどを装着し、利用者の視点でサインの設置位置の合目的性および視認性の検証も行った。

3.4 学生による企画提案とプレゼンテーション

実地調査後、学生間で意見交換を実施し、自分たちの気付きを分類した「サイン環境」「院内環境」「情報案内」の3つのカテゴリーに、学年縦断的プロジェクトの実施を目的のひとつとし、学生たちは上級生

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

*2 京都橘大学 現代ビジネス学部 都市環境デザイン学科

（連絡先）森絵美 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: e-mori@mw.kawasaki-m.ac.jp

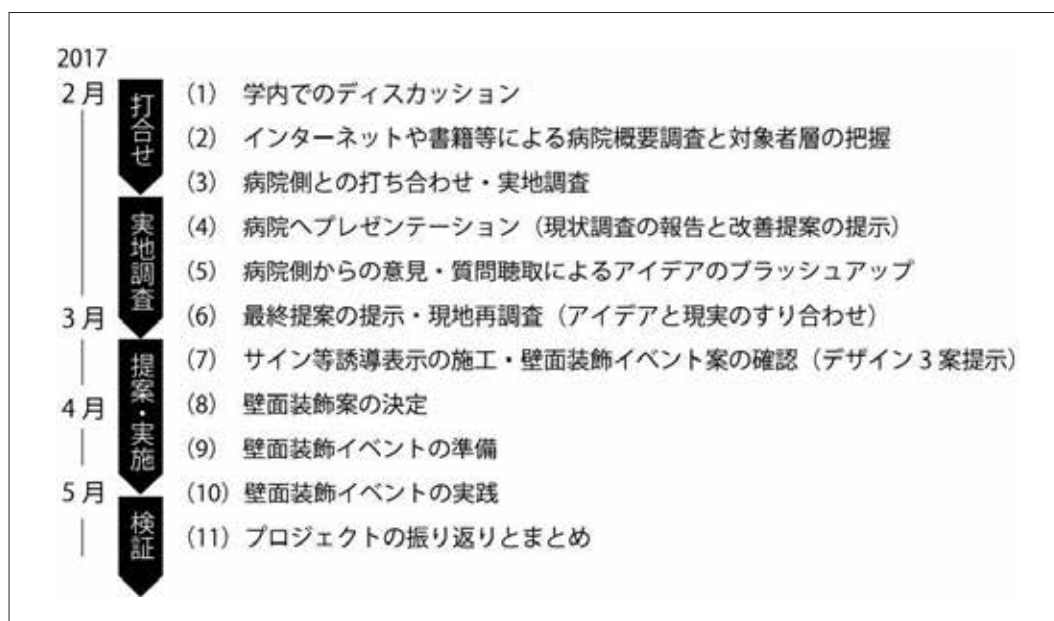


図1 病院プロジェクトの企画実践スケジュール

表1 病院側から伝えられた内容

＜病院を取り巻く現状＞

- ・市と町で共同設置する一部事務組合が運営する病院で、管理者は市長である
- ・高齢化や人口減少が著しく進み、過疎地域に指定されている
- ・中山間地域の中小病院ということもあり、常勤医師の確保が極めて困難である
- ・明確な将来展望を描けないため、建替えが難しい（新耐震基準はクリアしている）

＜提案に対する要望＞

- ・利用者の利便性向上に配慮した、病院内のサイン表示に関する提案をして欲しい
- ・高齢者にとって使い勝手良く、清潔かつ安全に利用できる方策を提案して欲しい
- ・職員のモチベーション向上につながる提案が欲しい
- ・地域住民や職員に愛着を持ってもらえる病院にしたい

をリーダーとしたカテゴリーごとのグループに分かれての検討を重ね、表2の22項目の改善提案を企画書としてまとめた。

作成した企画書を用いたプレゼンテーションに対して病院側から20案（表2の13と15を除く）の実施について承認されるとともに、細部に渡る意見交換を行った。

4. 企画提案の実施

4.1 サイン等誘導表示の施工

病院側からの承認を得た20案の施工に向けた具体策について、デザインやサイズ調整を再度行った。

今回の企画提案の柱となった、サインの位置や形状、デザインの改善に関する提案では、病院側から「提案のブルー系ではなく、ピンク系のサインにすることは可能か」との相談を受けたため、学生は色彩シミュレーション画像を複数パターン提示し、視認性と誘導性、病院の雰囲気との相互性等について、病院側で再検討された結果、当初提案のブルー系サインが採用された。

2017年2月、簡易的な制作物を持参し、病院側へ最終のプレゼンテーションを行った。耐久性を検討した上で、カッティングシート加工で対応できる物やA3サイズまでの表示は学生が制作し、その他の



図2 実地調査時の意見交換会

表2 「サイン環境」「院内環境」「情報案内」についての提案内容

項目	提案内容	
サイン環境	1	CT室へのサイン
	2	自動販売機、公衆電話のサイン
	3	階段、エレベーターのサイン
	4	婦人科へのサイン
	5	待合表示
	6	透析室へのサイン
	7	機能訓練室、物療室へのサイン
	8	トイレのサイン
院内環境	9	初診・再診の表示
	10	待合スペースの壁面装飾提案
	11	トイレ環境改善
	12	詰所の名称
	13	給湯室
	14	倉庫の名称
	15	消火器設置場所の改善
	16	ゴミ箱
情報案内	17	総合案内図
	18	エレベーター近辺の表示
	19	診療科目表
	20	掲示物
	21	診察室の表示
	22	待合のパンフレット整備

業者委託を必要とする制作物は、データ提供のみに留まり、病院側で施工の対応をすることで承認を得た。

4.2 壁面装飾イベントの開催

2017年5月13日、病院内1階外来待合の壁面（高さ2.6m、長さ約5m）において、地域住民、利用者、病院職員、学生と教員を含む約60名が参加し、壁面装飾イベントを実施した。

壁面装飾の図案をデザインするにあたり、「地域のシンボルである植物や隣接する旭川をモチーフにする」「装飾用素材は、扱い方法が簡単で、実施後の管理が容易なカッティングシートを用いる」「自由度の高いデザインにすることで、参加しやすいイベントにする」ことを決定した。学内で3案に絞ったデザイン案から病院側が1案を選定し、最終図案「新しい風」を完成させた。

予め準備したカッティングシートを、参加者が一枚一枚丁寧に壁面へ貼り付けるイベントとして作品を完成させた（図3）。

5. 学生アンケートによる考察

プロジェクト終了時に、参加した学生15名に無記名のアンケートによる振り返りを行った。アンケートは4段階評価の部分と記述式の部分から構成されている。

実施前の印象に関する記述では、以下の回答があった。

- ・ 病院側が学生とプロジェクトをするのは初めてと聞いたので、うまくいくのか不安だった
- ・ 大変そうで、正直、やりたくないと思った

- ・ 普段の授業課題と違って、今回は実現する可能性が高いと思い、楽しみだった
- ・ 病院側と意見をすり合わせて作っていく楽しさと、上手くできるかという不安もあった
- ・ 学生でどこまで病院の環境を変えることができるのかと思った
- ・ 病院全体の改善をすると聞き、大きなプロジェクトだという印象を受けた

これらの記述から、本プロジェクトに対する緊張感と不安感と同時に、期待感や責任感を抱いていたことが読み取れた。

図4に実施後の評価に関する4段階評価の結果を示す。

まず、本プロジェクト全体を通じた達成感や満足感、プロジェクト内容が適切であったかとの問いには、10名（15名中）がそう思うと評価を下している。さらに、地域や医療機関での実践的プロジェクトやチームで取り組むプロジェクトによって得られるものがあつたかの問いについても9名がそう思うと評価を下している。

このプロジェクトの何が良かったのか具体的に記述してもらったところ、＜プロジェクト全体を通した学び＞＜共同作業による喜び＞＜直接的に関わることの喜びと学び＞に分類することができた。

＜プロジェクト全体を通した学び＞

- ・ 提案したものが実際に使用されているところを見ることができ、嬉しかった
- ・ 企画から実行までのプロセスをしっかりと体験することができた
- ・ 現場ではどのような技術や物が求められている



図3 壁面装飾イベント当日の様子

のかを知ることができた

- ・ 病院側の要望を考慮しつつ制作を行う工程を学ぶことができた
- ・ 利用者の目線、病院の方の目線など、人によって違うということが発見できた
- ・ 自ら積極的に動くことができた
- ・ 提案したものの実際の現場での大きさの感覚や見え方を知ることができた

<共同作業による喜び>

- ・ サイン施工時、病院職員の方が一緒に掃除などをしてくださった
- ・ 壁面装飾イベント当日に地域の方と共同作業ができた

<直接的に関わることの喜びと学び>

- ・ 直接、現場を見ることでその病院の地域性やニーズを知ることができ、デザイン制作する上でキーカーラーや壁面のキービジュアルにつなげることができた
- ・ 壁面装飾では、実際に病院を利用されている方々や職員の声を直接聞くことができた
- ・ 医療スタッフ、患者など利用者の声に耳を傾けることの大切さを知ることができた

学生はデザインの企画立案から実行までのプロセスを経験することに加え、医療機関での実践が自身

の学びにつながったと感じ、さらに、利用者や職員と共同して完成できたことに満足していた。

一方、アンケートからは問題点も読み取れた。今後、ホスピタルデザイン分野について学ぶ意欲が高まったかとの問いや、自身の就職に対する意識が有益な方向に変化したかの問いにはそれぞれ1名、4名がややそう思わないと不満を持っていた。また、時間配分の適切さや自身の担当部分に関する計画性、分担内容のレベルの適切さなど、自身の実践に対する評価について、それぞれ1名、3名、2名がややそう思わないと評価をしていた。「スケジュール管理も大切だと実感した」「連携することの大切さをとても感じた」などの記述から、時間管理やグループ内での連携作業の過程で多少の問題が生じていたことが読み取れた。

6. 教育成果に対する考察

本稿の成果に思う内容について以下に纏める。

- 1) 実際の病院でデザインプロジェクトを行う経験は、学生に緊張感と義務感を抱かせるとともに、学習に取り組むモチベーションの高揚にもつながった。
- 2) デザイン能力や知識レベルの異なる学年縦断型のチーム編成は、デザインワークの役割分担や

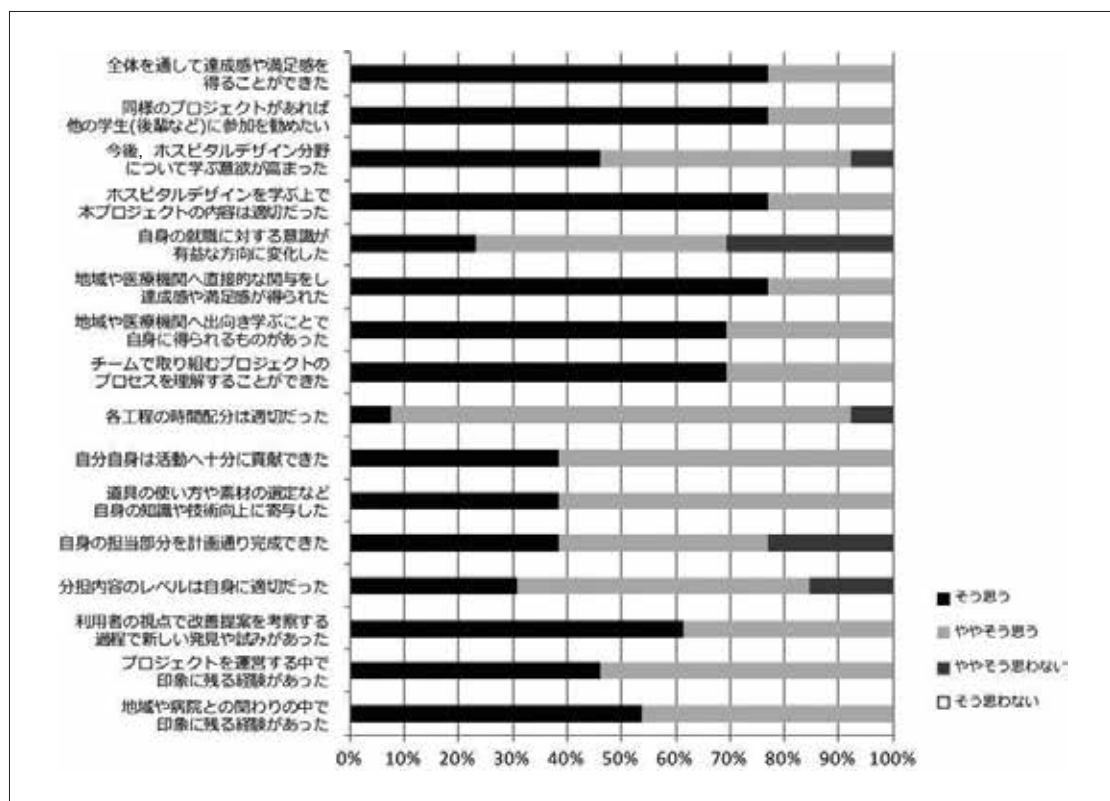


図4 学生アンケートの結果 (4段階評価の部分)

ディスカッション, 指示体系の構図を生み出し, より実践的なグループワークの環境へと繋がった。

- 3) 学生自ら緊張感を持って病院職員や利用者と接することで, 社会性を身につけることに貢献した。
- 4) グループワークを進める中で, スケジュール管理能力やコミュニケーション能力に個人の能力差が現れ, グループワークにおいて困難を感じた学生もいた。

- 5) 医療現場における実践的デザイン教育は, 学生自らの視点で医療福祉知識とデザインスキルが実社会で相乗することのニーズや重要性を知るとともに, 現状での自身の能力を認識する機会となった。

以上, 今回の取り組みが利用者サービス向上や病院環境改善の一環として有効であるとした上で, 更に実践を重ねる中で, 病院評価ならびに利用者評価の蓄積と検証が, ホスピタルデザインという分野の確立と普及のための課題と言えよう。

注

- †1) 情報発信や環境整備の観点から病院内での様々な問題を発見・予測し, それらを解決するためにデザインを応用することを指す。

文 献

- 1) 蓮見孝, 一ノ瀬彩, 岩田祐佳梨, 高嶋結, 玉井七恵, 貝島桃代: 筑波大学附属病院におけるアートデザインによる医療支援活動. 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 日本デザイン学会第56回研究発表大会, P31, 2009.
- 2) 小峰優佳, 岩田祐佳梨, 貝島桃代, 五十嵐浩也: 病院外来における待ち合いのデザインー筑波メディカルセンターにおけるはるまちポケットとカードの提案ー. 日本デザイン学会研究発表大会概要集, 日本デザイン学会第60回研究発表大会, P114, 2013.
- 3) 森絵美, 平野聖, 尾崎公彦, 真鍋克己, 合田喜賢: 病院の企画広報部門の役割ー岡山旭東病院を事例としてー. 川崎医療福祉学会誌, 25(2), 295-300, 2016.
- 4) 森絵美, 合田喜賢, 平野聖, 真鍋克己, 松本正富: 医療機関内における院内デザイナー配置に関する経営者の評価, 川崎医療福祉学会誌, 26(2), 242-250, 2017.

(平成30年1月10日受理)

Practice of Hospital Design Education through Hospital Project

Emi MORI, Yoshikata GODA, Momoka IWADO, Shunsuke NAKAMURA,
Masatomi MATSUMOTO, Kiyoshi HIRANO and Michisuke AOKI

(Accepted Jan. 10, 2018)

Key words : hospital, design education, event plan practice

Abstract

This report is related to educational practice in “the hospital project”. We cooperated with a hospital and put it into effect in 2017 with the project. The students who participated in the project got practicing recognition of a design work by this experience, and practicing mindset sprouted up for them after the project.

Correspondence to : Emi MORI

Department of Design for Medical and Health Care
Faculty of Health and Welfare Services Administration
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : e-mori@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.2, 2018 483 – 489)

